

## 第二百十話 海軍の戦力化には時間を要す！

近年、大東亜戦争に関連する帝国海軍に関する研究が進捗しているようだ。その実態は、巷間云われる平和主義者、欧米協調主義者という顔ではないもっと複雑な顔を持っているということだろう。意は尽くせないかも知れないが、帝国海軍の実態に迫ってみたい。

### 1 対米戦を目標とした戦備増強の推進(メモランダム 119、209 話参照)

対米戦を考慮した場合、対米艦船比率 7 割を如何に確保するかが海軍にとっての至上命題であった。支那事変勃発以降、事変の拡大に反対であった海軍までが、支那に介入し、戦備の度も急速に整えられていった。米国の海軍増強計画に対応して海軍戦備計画「④計画」を策定して本格的に大艦隊を増勢した。海軍の危機感の表れである。

### 2 第二次上海事変 (193/8/19～)

海軍は、華中・華南における日本の権益と居留民保護の責任を有していた。上海には、特別陸戦隊約 4000 人がいたが、それが三万人の支那軍に襲われた、第二次上海事変が勃発した。米内海相は、8/13 の閣議で断固膺懲を唱え、陸軍派兵を主張した。海軍は、渡洋爆撃(中攻機)を敢行し、海軍陸戦隊を増派し、陸軍部隊の派遣(上海派遣軍の編成)を強く要請した。総退却した支那軍を陸軍は追撃し、南京に入城(12/13)した。こうして支那事変は中支に拡大し、日本の不拡大方針は完全に破綻した。痛恨の極みだ。

### 3 海南島の駐留

南方作戦を整齊と行うためには、海南島の位置は絶妙であったし、海上交通保護のための基地としての機能を果たし得る位置でもあった。勿論鉄鉱石も魅力的であった。

1938/11/25、五相会議で、米内海相は、海南島攻略を提案し、それが合意事項となった。1939 年 2 月に、海軍は海南島の占領を占領(3 月にはスプラトリー諸島の日本領土編入)したが、米国は、これらの占領・軍事基地化がフィリピンへの脅威と認識していた。1941 年の夏以降、米国は比防衛の急速強化に努めていた。特に B17 等の爆撃機の配備を進めた。

海軍が策定した「対米英蘭戦争帝国海軍作戦計画」(10/20 内定)では、海南島の三亜港がトラック諸島等と共に前進根拠地に指定されていた。

海軍が海南島を重視していたのは、日米交渉の所謂「甲案」の中で譲れぬ駐兵地域の一つとして海南島が挙げられていることから明らかである。

日米英戦の回避を希求しながらも、開戦準備には万全を期すと云う、海軍のある意味では矛盾したような行動ではあるが、如何なる事態にも応じられるよう準備するのは兵家の常である。

陸軍と違って、海軍力の造成には時間を要し、その作戦準備も陸軍とは明らかに違う。

### 4 陸軍が政治力を発揮して、陸軍の意思を国策に反映させようとしたのに対して、海軍も、国策決定の重要なアクターであるにも拘らず、重要な国策を立案・提議することなく、陸軍や外務省の提案に対して、海軍の管掌領域に関してのみ、修正意見等を述べたと云われる。海軍は、海軍力増強を至上命題とし、海軍の作戦のための拠点確保等を重視していたと云われる。海軍が戦争反対と言って呉ればとのぼやきが陸軍関係者から漏れるのも宜なるかなである。海軍は利口だったのかも知れない。(失礼)